

# 短大生の喫煙に関する調査

渡 辺 律 子

## I. 緒言

我が国は、先進国には類を見ない喫煙率を維持している<sup>1-4, 8, 9)</sup>。喫煙は、個人の嗜好品であり満20歳以上であれば個人の判断で吸う事も自由である。一方、近年喫煙と健康の関係やマナーの問題が社会問題となっている。主流煙（喫煙者が吸っている煙）と副流煙（たばこの先からゆらぐ煙）の発ガン性物質の問題や喫煙とガンや呼吸器系疾患との因果関係は、統計的に明らかな因果関係が認められる<sup>1, 2, 4)</sup>。またニコチン依存により禁煙が出来ずに健康を害している人も多い<sup>3, 4)</sup>。喫煙マナーに関しては、「歩きたばこ」や「ポイ捨て」、他人への危害（すれ違いざまにたばこが皮膚や衣服に接触してやけどを負う、衣服が焦げる）等があげられる。千代田区は「歩きたばこ禁止条例」を施行した（2002年）。その後、福岡市が同様の条例を制定し、その他の自治体でも制定の動きが出てきている。2003年5月には健康増進法が施行され、「公共の場所、公共輸送、教育施設、保健医療施設でのたばこ煙への暴露に対する十分な保護」を義務づけた。これに伴って私鉄は駅構内の終日禁煙を実施した。市町村レベルでは小中学校での全面禁煙が広がっている。都道府県レベルでは和歌山県が公立小中高全校の全面禁煙に踏み切った（2002年）。以上のように行政レベルでの禁煙運動が少しずつ動いているように見える。世論では、「喫煙は憲法における幸福追求権で肯定されており、法律で認められた権利である」と主張する者がいる。一方では、「副流煙を吸わされるのは、基本的人権を侵されている」と主張する者もいる。喫煙率についてのデータを見ると<sup>8, 9)</sup>、未成年者の喫煙率と20歳代の女性の喫煙率の上昇、喫煙時期の低年齢化が指摘されている。教育現場では、小・中・高等学校での一貫した禁煙教育の必要性を感じ、授業や集会などで「たばこ教育」が行われている<sup>10-12)</sup>。このような社会状況の中で、学生たちは喫煙に対してどのような意識を持っているのであろうか。

本研究の目的は、学生の喫煙に対する意識を把握し、高等教育機関である本学における「たばこ教育」の意義及び必要性について検討することである。

## II. 調査方法

### 1) 調査対象及び実施時期

調査は2003年7月に質問紙を用いて行った。対象は本学の1年生で「女性の健康と運動」前期履修者160名のうち、アンケート実施日に出席していた141名であった。前期の最終授

業時の試験（60分間）終了後，調査用紙を配布し，記入をさせて回収した．そのうち140名の有効回答を得た．

## 2) 調査内容及び方法

アンケート調査は無記名方式とし，「たばこ」に関するアンケート調査として以下の点を明記し，学生の了解を得て行った．

この調査は，アンケートの集計をもとに「喫煙について」の資料を得る目的で行うものです．個人（あなた）に対する指導や教育を目的としたものではありません．得られたデータは，統計処理されます．個人のプライバシーを侵害するようなことはありません．

アンケートの主な内容は以下の通りである．

### (1) 全員対象

喫煙経験の有無/たばこに関する知識について

### (2) 喫煙習慣のある学生対象

喫煙の動機/その後習慣化したか/喫煙マナーについて/喫煙のメリット・デメリット

### (3) 喫煙習慣がない学生対象

喫煙者のマナーについて

回収したアンケートの集計結果を基に，以下3群に分けて分析を行った．

1. 「一度でもたばこを吸った経験が有る」群（n = 70）

2. 「喫煙群」（n = 39）

「一度でもたばこを吸った経験が有る」群のうち「喫煙が習慣化」「時々吸う」者のグループ

3. 「非喫煙群」（n = 101）

「喫煙経験が無」及び1. のうち「喫煙経験があったが，現在は吸っていない」者のグループ  
なお必要に応じて喫煙群と非喫煙群間の有意差検定をPearsonの $\chi^2$ 検定を用いて行った．

## III. 結果及び考察

本学の1年生で「女性の健康と運動」前期履修者160名のうち，アンケート調査実施日の授業に出席した学生141名の回答が得られた．そのうち140名の有効回答が得られた．喫煙群の学生の平均年齢は18.2歳，無喫煙群の平均年齢は18.0歳であった．「一度でも喫煙経験が有る」と答えた学生は70名であり，本アンケート回答者全員のちょうど半数の学生であった．以下，対象別に分析を行った．

### 1) 「一度でもたばこを吸った経験が有る」群

「初めてたばこを吸ったのはいつですか」の問いでは，高校生の時が43%，中学生の時が37%，小学生の時が16%，大学生が4%であった．喫煙年齢で最も早かったのは小学3年生

であった (図1)。

「喫煙の動機」は図2に示した通りで、最も多かったのは「何となく」であった。「その他」の動機として「周りがほとんど吸っていたから」「イライラを解消したかった」とあり、ともに大学1年で喫煙を始めた者であった。大学に入学してからの精神的な不安感やストレス、友人関係が喫煙の動機になっていることが推測される。しかし、今回の調査は大学に入学して3カ月後のアンケートなので、大学生活に慣れてからの後の喫煙率の動向も調べる必要があろうと考えられる。

## 2) 喫煙群について

「一度でもたばこを吸った経験が有る」群 (n = 70) のうち、「その後、たばこを吸う事が習慣化した」「時々吸う」が55%であり、たばこを吸った経験のある学生のうち半数以上が

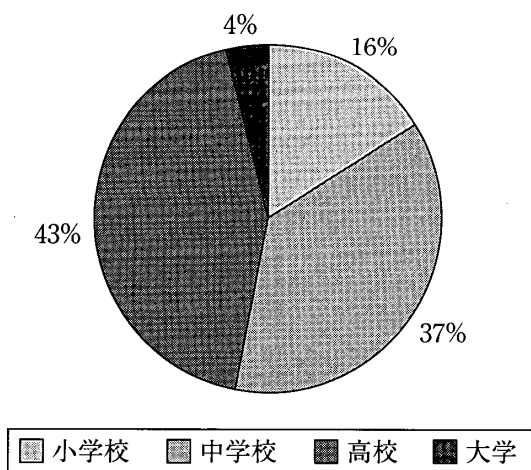


図1 初めてたばこを吸ったのはいつですか (n = 70)

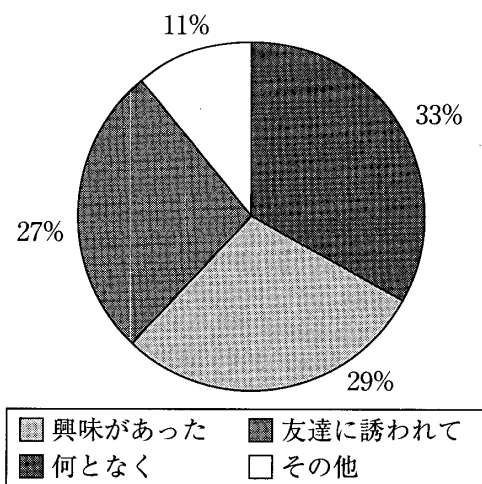


図2 喫煙の動機はなんですか (n = 70)

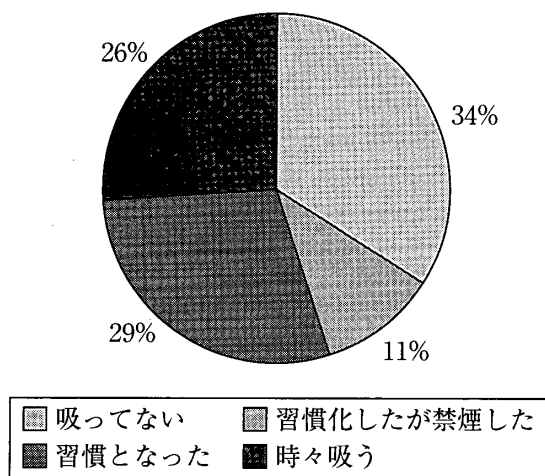


図3 最初の喫煙後、習慣化しましたか (n = 70)

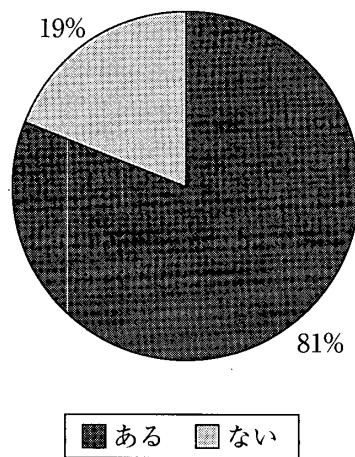


図4 禁煙しようと思ったことがあるか (n = 39)

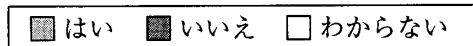
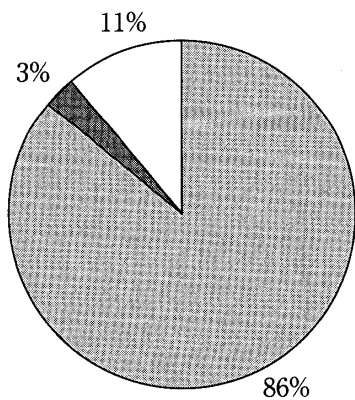


図5-1 喫煙時に周囲の人に気を使いますか  
(n = 39)

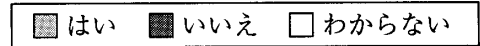
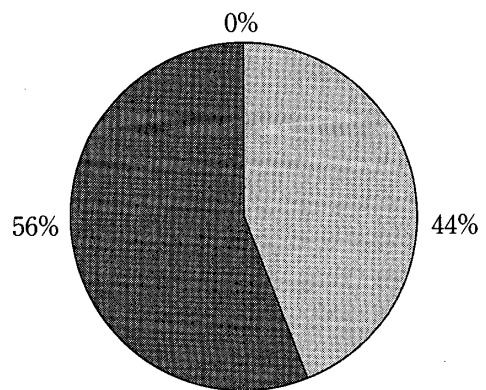


図5-2 周囲でたばこを吸っている人はあなたに気を使って吸っていますか (n = 101)

現在も喫煙習慣があることがわかった (図3)。JT (日本たばこ産業) の統計によると<sup>8)</sup> 日本の20歳代女性の4人に1人は喫煙習慣があると報告されており、今回の調査でも有効回答数の3.6人に1人は喫煙習慣があるという同様の結果が得られた。

喫煙群の81%が「いつか禁煙しようと思っている (思ったことがある)」と答えており、その理由として (複数回答あり) 「体によくないと思ったから」が10名、「お金が無い時・お金がかかる」が6名、「友人にとめられた時」が3名、「いつでもやめたいと思っている」が3名、「子供が出来た時を考えて」が2名であった。

禁煙理由は自分の体のことを考えての理由が多かったが、金銭的なことも禁煙の理由になっていることがわかった。いずれにしても多くの学生が禁煙したいと望んでいる姿がうかがえる。また、「禁煙しようと思った事がない」と答えた学生の理由は「いつでもやめられると思うから」(2名)であった。

「喫煙のメリット (良い点) ・デメリット (悪い点)」については、メリットは「落ち着く・リラックスできる・すっきりする」が18名、「おいしい」が2名、「暇つぶし」2名、「メリットなし」が8名であった。デメリットは「体に悪い・ガンになる・肺が黒くなる」が26名、「お金が無くなる」が8名、「周りに迷惑」が4名、「全部悪い」が3名、「ニコチンが切れると苛つく」が2名であった。メリットについては、本人の自覚であり、喫煙群のほぼ共通の感じ方であった。デメリットについては、学生自身は喫煙が身体に及ぼす悪影響を知識としては理解しているが、本人の自覚 (せきやたんが出る、走ると息苦しいなど) に欠けているようにも思われる。

### 3) 非喫煙群について

「いずれは自分も吸うかもしれない」の質問に「はい」と答えたのは6名であった。その理由は「イライラが解消できそう」というものであった。「いいえ」の理由としては「煙・においが嫌い」「体に合わない」「体のため」という生理的に受け付けないという理由や、「父・母・姉が吸っているのを見るといやな感じがする」という家族を反面教師的に見ている場合もあった。その他「お金がもったいない」「吸う理由が無い」を上げていた。

#### 4) 喫煙群・非喫煙群の比較

社会問題となっている喫煙時のマナーについて尋ねたところ、「周囲の喫煙者はあなたに気を使って吸っていますか」の質問に喫煙群は「はい」と答えたのは86%であった。いっぽう非喫煙群は「周囲の喫煙者はあなたに気を使って吸っていますか」の質問に「はい」と答えたのは44%であった。このように喫煙群と非喫煙群では、意識に大きな差が見られた(図5-1, 2)。喫煙者が周囲に気をつけて喫煙しているつもりであっても、非喫煙者はそのようには受け取っていないという結果であった。

喫煙群が「喫煙時のマナーで気を付けていること」として具体的に記述した事項は「歩きたばこ・ポイ捨てをしない」が15名、「吸わない人の前では喫煙しない」が10名、「灰皿の無いところでは吸わない」が9名、「子供や妊婦や老人の前で吸わない」が3名、「人ごみでは吸わない」が3名、「食事をしている人がいる時は吸わない」が3名その他、「火の始末」などであった。一方、非喫煙群は「喫煙者に気付けてもらいたいマナー」として「歩きたばこ・ポイ捨て」、「食事をする場所での喫煙」、「吸殻」や「火の始末」、「吸ってよいかを確認してほしい」であった。

たばこに関する知識について両群に質問したところ「たばこは自分や周りの人の健康を害することがある」という質問に対して、「わからない」と答えた3名(喫煙群2名、無喫煙群1名)をのぞいた全員が「はい」と答えている。それにもかかわらず、「たばこは体によい場合もある」の質問に対して、「はい」「わからない」が非喫煙群は33%、喫煙群は45%であった。その理由は「ストレスを取り除く・気分がスッキリする」であった。すなわち、喫煙について精神面ではプラス効果があると考えていると推測される。

「学校でたばこに関する教育を受けたことがあるか」の質問では、喫煙・非喫煙群をあわせて、約90%が「たばこに関する教育」を受ける機会をもっていたことが明らかになった。「無い」と答えた者は両群あわせ8.6%であった。喫煙群と非喫煙群で有意な差は認められなかった。平成14年度学習指導要領から小学校においても喫煙防止教育を実施することが明記されたが<sup>10, 11)</sup>、中・高等学校では従来から保健体育の保健分野で取り扱う内容になっている<sup>12, 13)</sup>。この点から考えると8.6%が、たばこに関する教育を受けたことが「無い」と答えているのは、問題があるとも考えられる。

#### IV. まとめ

たばこは嗜好品ではあるが、健康を害することがあるのは統計的に明らかであり、たばこのパッケージへの健康を害することの表示が義務付けられている<sup>1,6)</sup>。また20歳未満の喫煙は法律で禁止されているが、20歳未満の喫煙率は増加傾向にあり、喫煙開始年齢は低年齢化しているのが厚生労働省のデータでも示されている<sup>7)</sup>。本学の学生の「喫煙に関する調査」の結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) 喫煙群の81%が禁煙を考えたことがあった。その理由としては、「健康に及ぼす影響が多かった。
- 2) 喫煙マナーについて「周囲に気をつかっているか」の質問に対して、喫煙群は86%が「気をつかっている」と答えたのに対して、非喫煙群が、「喫煙者が気をつかっている」と答えたのは44%であり、意識に大きな差が見られた。
- 3) たばこに関する知識について(5項目)大方正しく理解をしていたが、「たばこは自分や周りの人の健康を害することがある」と認識しながらも、喫煙群の45%、非喫煙群の33%が「体に良い場合もある」と考えていた。

以上のことから本学学生は、喫煙が体に及ぼす悪影響については理解しているが、喫煙の精神面でのメリット・効用があるという意識が、喫煙の習慣化を促していると推測される。少数ではあるが、大学生活に適應するまでのストレス、不安感、人間関係が喫煙を始める動機となっていたり、現在は喫煙習慣が無くても「いずれは自分も吸うかもしれない」と答えた者もいた。喫煙が生活習慣病、ある種の疾病では生命の危機につながることもある。また、母性としての女性の観点から見ると、妊娠・出産・子育ての時期は精神的なストレスをたばこによって解消出来ない場合もある。大学教育の中で授業を有効に活用し、学生に精神的な面も含めた正しいたばこに関する知識を与えたり、具体的な禁煙プログラムを紹介したりすることにより、それをもとに喫煙行動に関する自己決定の機会を提供する必要があると示唆された。

謝辞：本アンケート調査・集計にあたっては、武蔵丘短期大学の太田あや子先生に協力・ご指導をいただきました。ここに感謝の意を記します。

#### 参考文献

- 1) 喫煙と健康—喫煙と健康問題に関する検討会報告書一、株式会社 保健同人社、2002
- 2) 厚生省編：厚生白書 平成9年度版、ぎょうせい、1977
- 3) 胎児からはじまるタバコ病、内田和仁、築地書館、1998
- 4) タバコはこんなに害になる、平山 雄、健友館、1997
- 5) 健康増進法 第5章第2節「受動喫煙の防止第25条」(2003年5月1日施行)
- 6) 世界保健機構(WHO)「たばこ規制枠組み条約」
- 7) 千代田区「歩きタバコ禁止条例」(2002年9月25日施行)
- 8) 日本たばこ産業 全国喫煙者率調査(2002)

- 9) <http://www.health-net.or.jp/tobacco/product/pd110000.html> (厚生労働省最新たばこ情報)
- 10) 文部省：小学校学習指導要領 (平成元年度3月), 1989
- 11) 文部省：小学校学習指導要領 (平成14年度3月), 2002
- 12) 文部省：中学校学習指導要領 (平成元年度3月), 1989
- 13) 文部省：高等学校学習指導要領 (平成元年度3月), 1989